

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日蓮研究 : 現世を浄土に
Author(s)	宇野, 正三
Citation	ぶらくしす , 22 : 61 - 71
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50888
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050888
Right	
Relation	



日蓮研究—現世を浄土に

A Study of Nichiren : Making This World into the Pure Land

宇野正三

Shozo UNO

『法華經』の要諦

以下の『法華經』についての論述は、鳩摩羅什翻訳の『妙法蓮華經』に基づいて行う。その從地湧出品に依れば、釈尊は成道後 40 余年から『法華經』を説き始めたと述べられている。一般に釈尊は 29 歳（19 歳説もある）で出家し、35 歳（30 歳説もある）で開悟したとされるので、『法華經』は 70 歳余りからの説法を基に作成されたことになる。釈尊は 80 歳で入滅（逝去）した。

仏は一切衆生（生きとし生きるもの）を悟らせ、成仏に導くために種々の説法を行う。その教法は大別して、声聞乗、緣覺乗、菩薩乗である。「声聞を求むる者の為には応ぜざる四諦の法を説いて、生・老・病・死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支仏（緣覺）を求むる者の為には応ぜざる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の為には、応ぜる六波羅蜜を説いて、

阿耨多羅三藐三菩提を得、一切種智を成ぜしめたまう。」（『真訓両読 妙法蓮華經並開結』

【以下、『真訓両読』と略称】、序品、72 頁）声聞乗とは、仏の説法を聞いて悟る道で、『法華經』では、四諦の教えが挙げられる。緣覺乗は、因縁を觀じて悟る道で、『法華經』では十二因縁説が説かれる。菩薩乗は、自他の救いを求めながら悟りを目指す道で、『法華經』では、六波羅蜜がその修行法である。四諦の説とは、①苦諦（迷いの生存は苦であるという真理）②集諦（苦の原因は無常な存在への執着心であるという真理）③滅諦（悟りの境地は安樂な境涯＝涅槃であるという真理）④道諦（涅槃の境地に達するために八つの正しい修行の道＝八正道があるという真理。）八正道の内容は次のとおりである。①正見（正しい見解）②正思（正しい思惟）③正語（正しい言葉）④正業（正しい行い）⑤正命（正しい生活）⑥正精進（正しい努力）⑦正念（正しい思念）⑧正定（正しい禪定）。十二因縁説とは、「無明（永遠界への無知）は行に縁たり（無明が行＝潜在的形能力を生じる縁となっている）、行は識（認識作用）に縁たり、識は名色（名称と形態）に縁たり、名色は六入（眼・耳・鼻・舌・身・意）に縁たり、六入は觸（感官と対象との接触）に縁たり、觸は受（感受作用）に縁たり、受は愛（妄執）に縁たり、愛は取（執着）に縁たり、取は

有（生存）に縁たり、有は生（生まれること）に縁たり、生は老死・憂悲・苦悩に縁たり。無明滅すれば則ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す、識滅すれば則ち名色滅す、名色滅すれば則ち六入滅す、六入滅すれば則ち触滅す、触滅すれば則ち受滅す、受滅すれば則ち愛滅す、愛滅すれば則ち取滅す、取滅すれば則ち有滅す、有滅すれば則ち生滅す、生滅すれば則ち老死・憂悲・苦悩滅す。」（『真訓両読』、化城喩品、255－256 頁）という内容で、無明が根本原因で、苦悩の生存が結果し、無明が無くなれば涅槃＝安楽な境涯が得られると説く。

菩薩の修行方法である六波羅蜜とは、①布施（三つあり、財物を与える財施、仏法を説く法施、恐れを取り除く無畏施）②持戒（戒律を守る）③忍辱（艱難に耐える）④精進（仏道修行に真摯に努める）⑤禪定（精神を統一し、心を安定にする）⑥智慧（正覚を得る）

釈尊は、凡夫（無明に支配されている衆生）を迷いの世界から脱出させるために「三界火宅の喩え」を『法華経』で説く。すなわち、「諸の声聞衆及び縁覺乘を求むるものに告ぐ、我苦縛を脱し、涅槃を速得せしめたることは、仏方便力を以て、示すに三乗の教えを以てす。」（『真訓両読』、方便品、91 頁）「舍利弗、如来は但一仏乘を以ての故に、衆生の為に法を説きたもう。余乗の若しは二、若しは三あることなし。」（『真訓両読』、方便品、101－102 頁）この説法に於いて、煩惱の火で燃え盛るこの世を三界火宅と喩え、その中で危険に気付かず、遊び戯れている子供たちを、父親は火宅から脱出させるために手だてを講じる。三界とは、欲界、色界、無色界から成る迷界を意味する。最下の欲界は、種々の欲望に支配された世界。色界は欲界の上にあり、欲望の束縛からは脱しているが、肉体などの物質から制約されている世界。最上層の無色界は精神的世界である。「此の舎（三界）已に大火に焼かる。我及び諸子若し時に（遅れないように）出でずんば必ず焚かれん。我今当に方便を設けて、諸子等をして斯の害を免るることを得せしむべし。父諸子の先心に（以前から）各好む所ある種々の珍玩奇異の物（珍しい玩具や変わった物）には情必ず樂着せん（求めて止まない）と知って、之に告げて言わく。汝等が玩好するところは希有にして得難し。汝若し取らずんば後に必ず憂悔せん。此の如き種々の羊車・鹿車・牛車、今門外にあり、以て遊戯すべし（それらの車で遊びなさい）。汝等此の火宅より宜しく速やかに出で来るべし。汝が所欲に随って皆当に汝に与うべし。爾の時に諸子、父の所説の珍玩の物を聞くに、其の願いに適えるが故に、心各勇鋭して互いに相推排し（勇んで押し合いながら）、競うて共に馳走し争うて火宅を出ず。（中略）舍利弗、爾の時に長者各諸子に等一の（同じように）大車（大白牛車・仏果の喩え）を賜う。」（『真訓両読』、譬喩品、143－145 頁）「（釈尊は）但智慧方便を以て三界の火宅より衆生を拔濟（救出）せんとして、為に三乗の声聞・辟支仏・仏乘を説く。」（『真訓両読』、譬喩品、150 頁）「（釈尊）舍利弗、若し衆生あり、内に智性あって、仏世尊に従いたてまつりて法を聞いて信受し、慇懃に精進して（修行に精励し）速やかに三界を出でんと欲して自ら涅槃を求むる、是れを声聞乗と名づく。彼の諸子の羊車を求むるを以て火宅を出ずるが如し。若し衆生あり、仏世尊に従いたてまつりて法を聞いて信受し、慇懃に精進して自然慧（師の教導に拠らず、自らの努力

で得る悟り)を求め、独善寂(独りで寂靜の境地を体得すること)を染い深く諸法の因縁を知る、是れを辟支仏乗と名づく。彼の諸子の鹿車を求むるを為て火宅を出ずるが如し。若し衆生あり、仏世尊に従いたてまつりて法を聞いて信受し、勤修精進して、一切智・仏智・自然智・無師智・如来の知見・力・無所畏を求め、無量の衆生を愍念安樂し(憐れみをもって安樂の境地に至らせようとし)、天・人(天界と人間界の衆生)を利益し一切を度脱する(一切衆生に利益を与え、解脱させる)、是れを大乘と名づく。菩薩此の乗を求むるが故に名づけて摩訶薩(偉大な人の意味で、菩薩の尊称)とす。彼の諸子の牛車を求むるを為て火宅を出ずるが如し。」(『真訓両読』、譬喩品、151-153頁)「是の諸の衆生は皆是れ我が子なり。等しく大乘を与うべし。人として独り滅度を得ることあらしめじ。皆如来の滅度を以て之を滅度せん(一切の衆生に如来と同じ悟りを成就せしめる)。」(『真訓両読』、譬喩品、153-154頁)「諸仏方便力の故に、一仏乗に於いて分別して三(声聞乗、縁覺乗、菩薩乗)と説きたもう。」(『真訓両読』、譬喩品、155頁)。仏陀は種々の修行法を説くが、^{すべ}全て衆生を仏にするためである。

大乘仏教は、出家の仏道修行者たちが自己の悟りを求めることに集中して、利他の面に乏しいことを批判し、彼らの仏道を小乗(自分しか悟りに運ばない小さな乗り物)と貶称し、正しい仏道は一切衆生と共に悟りを目指すべきで、このような立場を大乘(大きな乗り物)と呼んだ。多くの大乘経典は声聞や縁覺(二乗)は小乗仏教として、彼らを成仏不可能とした。『法華経』は、このような大乘経を真の仏説ではないとし、声聞、縁覺、菩薩の何れも悟りに向かう修行方法が異なるのみで、どの道も成仏に向かう道=仏乗であると説いている。故に、三乗か一乗ではなく、三乗も本質においては一乗=仏乗なのである。仏は、生きとし生きる者を仏果に至らすために、多様な法を説き、その何れも真実なのである。

釈尊は続ける。「我も亦是の如し。衆聖の中の尊、世間の父なり。一切衆生は皆是れ吾が子なり。深く世樂に著して慧心(菩提心=悟りを求める心)あることなし。三界は安きことなし、猶火宅の如し。」(『真訓両読』、譬喩品、163頁)「今此の三界は皆我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり。而も今此の処は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を為す。」(『真訓両読』、譬喩品、163頁)「我は為れ法王、法に於いて自在なり。衆生を安穩ならしめんが故に世に現ず。」(『真訓両読』、譬喩品、167頁)

さらに、『法華経』は次のような「長者窮子の喩え」を説く。すなわち、長者の子が幼児の時に親元を逃げ去り、行方不明のまま50余歳になるまで貧窮な境遇に難渋していた。その子に出会って我が子と識った長者は徐々に豊かな生活に馴致させてから、親子であることを明かし、全財産をこの子に与えた、という内容である。長者は仏のことで、その子供は仏子である自己の真実に気付かず、困苦の人生に流転し、卑小な思いに囚われていたが、最後には仏子であることを自覚し、安樂を得たことが譬えられている。「父其の子の志意下劣なるを知り、自ら豪貴にして子の為に難かるるを知って(大富豪の父は卑屈になっている子に配慮して)、審かに是れ子なりと知れども、而も方便を以て佗人に語って、是

れ我が子なりと云わず。」(『真訓両読』、信解品、182-183頁)「此れ実に我が子なり、我実に其の父なり。今吾が所有の一切の財物は皆是れ子の有なり。(中略)世尊、大富長者は則ち是れ如来なり。我等は皆仏子に似たり。如来常に我等を為れ子なり説きたまえり。世尊、我等は三苦(苦苦、壊苦、行苦。苦苦は好ましくないものから受ける苦、壊苦は好ましいものが壊れることから受ける苦、行苦は無常な世界から受ける苦)を以ての故に、生死の中に於いて諸の熱惱(苛烈な苦惱)を受け、迷惑無知にして(蒙昧の境に墮して)小法に樂著せり(小成を求めるのみで、成仏への道からは離反している)。(『真訓両読』、信解品、188-189頁)「仏我等が心小法を樂うを知ろしめして、方便力を以て我等に随って説きたまう。而も我等真に是れ仏子なりと知らず。今我等方に知りんぬ、世尊は仏の智慧に於いて捨捨したもう所なしと(釈尊は惜しみなく仏果を我々に与えようとしている)。(『真訓両読』、信解品、190頁)「我等昔より来、真に是れ仏子なれども、而も但小法を樂う。若し我等大(成仏)を樂うの心あらば、仏則ち我が為に大乘の法を説きたまわん。今此の經(法華經)の中に唯一乘を説きたまう。」(『真訓両読』、信解品、190頁)釈尊は出家の弟子が全員成仏できると断言する。すなわち、「我が諸の弟子の威徳具足せる其の数五百なるも、皆當に授記すべし(明確に成道を予言する)。未来世に於いて咸く成仏することを得ん。」(『真訓両読』、授記品、229頁)

さらに釈尊は『法華經』に帰依すれば、出家修行者のみならず、一切衆生が成仏できると宣告する。「世尊、藥王菩薩に因せて八万の居士(菩薩)に告げたまわく、藥王、汝是の大衆の中の無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・堅那羅・摩睺羅伽(以上の八種類の神々は八部衆と総称され、仏法の守護神である)・人と非人(人間でないもの)と及び比丘(具足戒を受けた男性出家者)・比丘尼(具足戒を受けた女性出家者)・優婆塞(在家の男性信者)・優婆夷(在家の女性信者)の聲聞を求むる者・辟支仏を求むる者・仏道を求むる者を見るや。是の如き等類咸く仏前に於いて妙法蓮華經の一偈一句を聞いて、乃至一念も(一念でさえも)隨喜せん者には我皆記(成仏するとの予言)を与え、授く。當に阿耨多羅三藐三菩提(悟り)を得べし。仏、藥王に告げたまわく、又如來の滅度の後に、若し人あつて妙法蓮華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く。」(『真訓両読』、法師品、305-306頁)

万人の成仏を認める『法華經』は特に、提婆達多と竜女の成道を説いて、悪人成仏と女人成仏を高調する。仏教では最も重い罪として五逆罪を挙げている。すなわち、①殺母②殺父③殺阿羅漢④出仏身血(仏の身体を傷つけて出血させること)⑤破和合僧(教団の和合を破壊すること)である。提婆達多は、このうち三悪業を犯した。すなわち、阿羅漢を殺し、大石を落として釈尊を傷つけ、教団から信奉者と共に離脱して和合僧(統率を成した僧侶の集団)を破壊した。五逆罪を為すと、極苦の無間地獄に墮ちるとされたが、その提婆達多の成仏を釈尊は予言し、保証した。「諸の四衆(比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷)に告げたまわく、提婆達多却つて後(この後)、無量劫を過ぎて、當に成仏すること得べし。」

(『真訓両読』、提婆達多品、346-347頁)また、女性には五障があるとされ、①梵天王(色

界に属する仏法の守護神)②帝釈天(欲界に属する仏法の守護神)③魔王(欲界に属する、仏道を妨げる邪神)④転輪聖王(武力に依らずに世界を治める理想的王)⑤仏の五つには、女性は成れないとされた。女性は小器と見做され、大善人にも大悪人にも成り得ないということなのであろう。併し、『法華経』は此の経を修業した八歳の竜女が 釈尊や弟子らの目前で即身成仏したことを叙述し、女人成仏を明証した。「当時の衆会(釈尊や弟子達ら)、皆竜女の忽念の間に變じて男子となつて、菩薩の行を具して、即ち南方無垢世界に往いて宝蓮華に坐して等正覺を成じ、三十二相・八十種好(仏に具わる身体的特徴)あつて、普く十方の一切衆生の為に妙法を演説する(説く)を見る。」(『真訓両読』、提婆達多品、355頁)

釈尊曰く。「若し是の善男子・善女人、我が滅度の後、能く窃かに(そつと)一人の為に法華経の乃至一句も説かん。当に知るべし、是の人は則ち如来の使いなり。」(『真訓両読』、法師品、308頁)「薬王、此の経は是れ諸仏の秘要の蔵なり(悟りを成就させる秘力が込められている)。(中略)而も此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや。」(『真訓両読』、法師品、312-313頁)

いよいよ釈尊は『法華経』の眼目である自分の本地(本質)を明かす。「一切世間の天人及び阿修羅は皆、今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城(古代インドのマガダ国の都城)を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり。然るに善男子、我れ成仏してより已来、無量無辺百千万那由他劫(無限の時間=永遠)なり。(この無限・永遠の仏は本仏とも称される。)」(『真訓両読』、如来寿量品、416頁)

「諸の善男子、如来諸の衆生の小法を樂える(永遠の仏を説かない教説に志向する)徳薄垢重の者を見ては、是の人の為に我(釈尊)少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我実に成仏してより已来久遠なること斯の如し。(中略)是の如く我成仏してより已来甚だ大いに久遠なり。寿命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。」(『真訓両読』、如来寿量品、419-421頁)

釈尊は何を悟ったかと言えば、無限の存在=永遠=本仏に目覚め、本仏との自覚的一体性を実現したのである。この事を釈尊自身が宣告することによって、内証において、本仏が顕現していることを明らかにしている。釈尊や日蓮は本仏そのものではなく、孰れも本仏を体得した覚者であったのである。『法華経』は本仏への覚醒に我々を導引する良薬であり、そのような経力を有する。

悟りは本仏を自覚することであるから、声聞、縁覺、菩薩、仏の悟りに違いはないが、悟りに至る修行法は異なり得て、三乗はその区別である。併し、我々の悟りの深さ、業(行為とそれが心に残す習慣性=習氣)の消滅の程度には相違があり得る。完全な人格を獲得するには、引き続き修行に奮励しなければならない。

「仏(釈尊)、弥勒菩薩摩訶薩に告げたまわく、阿逸多よ、其れ衆生あつて、仏の寿命の長遠是の如くなるを聞いて、乃至能く一念の信解(信心を併せ持った理解)を生ぜば、所得の功德無量限量あることなけん(無限の存在を自覚する正覺=真実の悟りが得られる。)」

『真訓両読』、分別功德品、438 頁)

「是の法華經は大いに諸の菩薩摩訶薩を饒益して(菩薩の修行を進展させ)、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。是の故に諸の菩薩摩訶薩、如来の滅後に於いて、常に是の經を受持し読誦し解説し書写すべし。」(『真訓両読』、常不輕菩薩品、494 頁)「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の藏・如来の一切の甚深の事、皆此の經に於いて宣示顯説す。」(『真訓両読』、如来神力品、502 頁)『法華經』の中に、仏の深奥の教えがすべて含まれ、説かれているというのである。「世は皆牢固ならざること、水沫泡焰(水のしぶきや泡や陽炎。何れも儂いものの喩え)の如し。汝等咸く应当に疾く厭離の心を生ずべし。」(『真訓両読』、隨喜功德品、460 頁) 仏教は諸行無常の教説との言辞が喧しいが、釈尊は有為轉變の無常の世界からの離脱を高調しているのである。

釈尊は『法華經』の聴衆全員や未来の人々に対しても滅後の流布を委嘱する。「我、無量百千万億阿僧祇劫に於いて是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり(成道達成のため、懈怠なく修行に努めた)。今以て汝等に付属す。应当に一心に此の法を流布して、広く増益せしむべし(多くの衆生に仏果を得させるべきである)。」(『真訓両読』、囑累品、507 頁)「未来世に於いて、若し善男子・善女人あつて如来の智慧を信ぜん者には、当に為に此の法華經を演説して、聞知する(聞き、知る)ことを得せしむべし。其の人をして仏慧を得しめんが為の故なり。若し衆生あつて信受せざらん者には、当に如来の余の深法の中に於いて宗教利喜すべし(『法華經』以外の仏説を説き、仏道を成就せしめ、安樂の境地を享受せしむべきである)。」(『真訓両読』、囑累品、508-509 頁) 釈尊は『法華經』を受容しない人には、仏法の他の教えで教導することを慫慂している。例えば、浄土三部經などで説く阿弥陀仏も無限の存在を意味し、法華經で説く本仏と同一であり、その本願に憑る念仏によって成仏を目指すのも勝れた仏道である。「若し如来の滅後後の五百歳の中に、若し女人あつて是の經典(法華經)を聞いて説の如く修行せば、此に於いて命終して、即ち安樂世界の阿弥陀仏の大菩薩衆の圍繞せる(阿弥陀仏が大菩薩達に囲まれている)住所に往いて、蓮華の中の宝座の上に生ぜん。」(『真訓両読』、葉王菩薩本事品、527 頁)

嚮に引用した長者窮子の喩えで、長者とは永遠・無限の本仏を意味している。我々は、この本仏から時間的現象界に現れ出でている子である。併し、子はそのことに無知で、貧者のように、諸行無常のような消極的仏教觀に埋没している。悟りとは、釈尊と同じく、この本仏との自覚的一体性を成就することに他ならない。『法華經』は、この經典を信じる我々を正覺に導く経力を有しているのである。

南無妙法蓮華經

日蓮は在世の時代を末法の世と考えた。釈尊入滅後、2,000 年経つと仏教は衰微し、悟りも修行もない末世になるとの説があった。中国において、釈尊の入滅時を、今日の学説

より遙かに遡^{さかのぼ}って、西暦で言えば紀元前 949 年とした教説を日本は採用し、平安時代の永承 7 年 (1052 年) から末法に入ったと考えた。日蓮もこの説に基づき、人々の機根が低下した濁世^{じよくせ}にこそ救済力最強の經典と日蓮が考えた『法華經』を流布すべく、他の立場を断固として排斥する折伏^{しやくぶく}的伝道法で『法華經』への帰依を唱導した。「此^{かく}の如き (末法の) 闢^{ひらく}諍^{じやう}堅固^{けんこ}の時は余經^{じよきやう}の白法^{びやくほう} (仏の教え) は驗^{しるし} (悟らせる効力) 失せて、法華經の大良薬を以て此の大難をば治^じすべしと見えたり。」(『法華初心成仏鈔』、『昭和定本』 1, 422 頁) 日蓮は、日本の人々が『法華經』に帰依しなければ、日本に外国が侵略してくる (他国侵逼難^{たこくしんびつなん}) と警告し、『法華經』信仰を確立することこそ、この国難を打開できる唯一の方策と考えた。実際、日蓮の在世中に、二度蒙古軍が日本に來襲した (文永の役・弘安の役)。

釈尊が『法華經』を説く前に語ったとされる『無量義經』には、「(如来は成道已來) 四十余年には未だ真実を顕^{あら}わさず」¹とあり、日蓮は釈尊のこの言葉を重視し、『法華經』以前のお経は真実を述べていない權經^{ごんきやう}であるとした。『法華經』にも、「(釈尊) 正直に方便を捨てて、但無上道を説く」(『真訓両読』、方便品、122 頁) とあり、釈尊は以前の教説を否定し、『法華經』に於いてこそ、真実の説法をしたとも読める。併し、『法華經』には既に引用したように「舍利弗、如来は但一仏乘を以ての故に (成仏させるために)、衆生の為に法を説き給う。余乗の若しは二、若しは三あることなし。」(『真訓両読』、方便品、101-102 頁) とあり、如来は一切衆生を悟らしめるために説法しており、この意味で、方便を含む如来の一切の教説は真実であることを『法華經』は明かしている。古来、これを開權顯実と呼んでいる。中国の天台大師・智顛曰く、「開權顯実とは、一切の諸法は皆妙ならざること莫く、一色一香^{いっしきいっこう}も中道に非ざること無し (全ての存在が本仏の顯現である)。」² 釈尊の一生の説法を仏乗として総括する立場を智顛は絶待妙と称し、『法華經』以前の經典には釈尊の真意が十分に示されていないとする立場を相待妙^{そうだいみやう}と規定した。「若し僂 (方便の教え) を破して (否定して) 妙 (真実の教え) を顕^{あら}わすには、即ち上の相待妙を用ゆ。若し僂を開して妙を顕^{あら}わすには (方便の教えも本質的には真実であることを明らかにするには)、即ち上の絶待妙を用ゆ。」³ すなわち、『法華經』以前の經典の説を方便として、『法華經』においてこそ真実が顯揚されているとするのが相待妙、『法華經』以前の説も成仏に導く教えとして、釈尊の一切の教説を仏乗として包含するのが絶待妙の立場である。日蓮は多くの經典が二乗 (声聞、縁覺)、女性、五逆罪などを犯した極悪人らの成仏を否定するが、『法華經』は生きとし生けるものの成仏を認めているとして、この經典に帰依してこそ成仏できるとした。そのため、一部の衆生の成仏を認めない經典を拒否して、ひたすら『法華經』を受持することを高唱した。「生死の大海を渡らんことは、妙法蓮華經の船にあらずんばかなうべからず。」(『権地四郎殿御書』、『昭和定本』 228 頁) 日蓮の説法態度は相待妙の性格が強いと言うことが出来る。「諸經は知者猶^{なほ}仏にならず。此の經 (法華經) は愚人も仏因^{ぶついん}を種^{うゆ}べし (成仏に至らしめる)。」(『開目抄』、『昭和定本』、604 頁) 併し日蓮は次のようにも説いている。「(釈尊の) 初成道の始めより泥洹^{ないおん} (涅槃。この場合は逝去の意) の夕べにいたるまで、説くところの所説皆真実なり。」(『開目抄』、『昭和定本』 539 頁) 併し、

「但、法華經計り、教主釈尊の正言なり（釈尊の真意が説かれている）。」（『開目抄』、『昭和定本』539頁）と述べ、法華經第一の立場を唱道する。「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ず（正しい教えである『法華經』を信じず、謗れば、人々の成仏の種が消失し、悟りが不可能になる）。」（『聖愚問答鈔上』、『昭和定本』361頁）日蓮は、釈尊の説いた他の諸經では悟ることが出来ず、成仏は『法華經』によって実現すると考えていた。「されば諸經にしては仏になるべき者も仏にならず、法華經は仏になりがたき者すら尚仏になりぬ。」（『法華題目鈔』、『昭和定本』402-403頁）

自他共に悟りを目指す大乘仏教が興起した時、その信徒が当時の二乗（声聞、縁覚）は自己の悟りのみを求めており、利他心が欠如していると非難し、彼らを小乗仏教と貶称した。併し、声聞、縁覚は悟りを求める修行法が相違するのみで、目的は成仏なのである。多くの大乘經典が二乗不成仏を強調したのは、利己的修行では成仏できないことを指摘したものである。二乗は成仏できないとの批判は、小乗教徒とされた当時の修行者を糾弾したもので、声聞、縁覚そのものについて斯様な指弾は仏説ではない。

智顛は悟りの世界を万象に本仏が具わっていることから教説を展開する。「界内外（主観・客観）の一切の陰入（現象世界全体）は皆心に由って起こる。仏、比丘に告げたまわく、『一法に一切の法を攝す、所謂心是れなり』。」⁴この心とは無限・永遠の本仏を意味する。一切の存在が本仏から生じ、それに包含されている。この実相に基づいて、智顛は一念三千の理説を創唱する。先ず、十如是から論ずる。「十種の五陰（色・受・想・行・識）は一一に各十法を具す。謂わく、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり。」⁵この教説は『法華經』の釈尊の次の説法に基づいている。「仏の成就したまえる所は、第一希有難解の法なり。唯仏と仏と乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。所謂諸法（諸存在者）の如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等なり。」（『真訓両読』、方便品、87-88頁）

十如是の相とは存在者の外面の様相、性とは性質、体とは本体、力とは存在者の能力、作とは能力の現れ出た作用、因とは果が生じる直接的原因、縁とは因としての働きを助ける間接的原因、果とは因縁作用の結果、報とは結果がもたらす報い、本末究竟等とは、本の相から末の報までの九つの範疇が諸存在者の在り方を形成し、本仏の現れとして、平等即差別を成していることを意味する。

さらに、智顛は十界互具を説く。迷悟の世界に十界があり、それらが互いに含み合う。すなわち、十界とは、衆生界を下位から上位へと順に、地獄（瞋=怒りに満ちた苦悶の世界）・餓鬼（貪欲熾烈で不満の絶えない世界）・畜生（癡=道理に暗い愚の世界）・修羅（慢心強盛のため争い合う世界）・人（喜怒哀楽の人間世界）・天上（歓喜に溢れているが、下位の世界への転落を免れ得ない世界）・声聞（仏の教えを聞いて悟る世界）・縁覚（因縁を觀じて悟る世界）・菩薩（六波羅蜜を實踐して悟る世界）・仏（本仏との一体性を自覚した世界）の諸世界である。

仏界は無限・永遠の本仏を根底に有し、無限の存在であることにおいて、他の九界を全

て包含している。他の九界も本仏の顕現である。このため、十界が本仏に媒介されて互具し、百界が成立する。

また、仏教は存在者の全体に三種の世間（世界）があるとする。すなわち、五蘊世間、衆生世間、国土世間である。五蘊世間とは、個々の衆生の世界で、色（物質）・受（感受作用）・想（表象作用）・行（意志作用）・識（認識作用）から構成されている。衆生世間は、個々の衆生から成る世界である。国土世間は衆生が住んでいる自然世界である。本仏は万象を含むから、三種世間は一体である。自然界の根底にも本仏が在りますのである。山川草木悉皆成仏とは這般の事情を語っているのである。決して、自然界が悟っているという意味ではない。

十界互具から成立する百世界の各界に十如是があるので、千世界となり、更に千界に三種の世界があるので、合計して三千種類の世界があることになる。我々の一念は本仏を通して全存在の三千世界と一体である。これが一念三千の教義であり、この真実に気付くことが正覚であるとするのが、智顛の教説である。智顛は次のように説いている。「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具して、百法界なり。一界に三十種の世間を具し、百法界は即ち三千種の世間を具す。此の三千は一念の心に在り。若し心無くんば已みなん。介爾にも心（微小の心も）有れば即ち三千を具す。（中略）祇、心は是れ一切の法、一切の法は是れ心なり。」⁶「一念三千は九界即仏界、仏界即九界と談ず。」（『撰時抄』、『昭和定本』1, 004 頁）

この一念三千の事態を止観（精神統一して、観照する）によって把握するのが智顛の立場である。日蓮は、それを把握する修行法として、南無妙法蓮華經と唱える唱題を宣揚した。「仏になる道には、我慢偏執の心（慢心や偏った執着心）なく、南無妙法蓮華經と唱え奉るべき者なり。」（『法華初心成仏鈔』、『昭和定本』1, 433 頁）智顛は『法華經』八卷二十八品の前半を迹門、後半を本門と称した。迹門は迹仏（垂迹の仏）としての釈尊の説法で、本門は自己の内面の無限・永遠の仏（本仏）に目覚めた釈尊の説法である。「序より安樂行に至る十四品は迹に約して開権顕実す。涌出より經を訖る十四品は本に約して開権顕実す。」⁷「一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしずめたり（本門寿量品で説かれた本仏を自覚することによって一念三千が体得される）。竜樹、天親知って、しかもいまだひろいさず。但我が天台智者のみこれをいだけり。一念三千は十界互具よりことはじまれり（本仏なしには十界互具は成立しない）」（『開目抄』、『昭和定本』539 頁）

日蓮は止観よりも唱題の方が、より強力に無限・永遠の本仏を体得することが出来ると説いた。「只、南無妙法蓮華經とだにも唱え奉らば、滅せぬ罪や有るべき、来たらぬ福（悟り）や有るべき。（『聖愚問答鈔下』、『昭和定本』386 頁）」「正直に方便を捨て、但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱うる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三觀三諦（空假中の三觀・真理一空は永遠界、仮は永遠界の時間的現れ、中は一切の存在は永遠と時間の一体であること。存在についてのこの三つの見方・真理）即ち一心に顕われ（この真理を心で把握すれば）、其の人の所住の処は常寂光土なり（このような覺

者の住む処は浄土になる。』(『当体義鈔』、『昭和定本』759-760頁)「汝早く信仰の寸心(心)を改めて、速やかに実乗の一善(法華經)に帰せよ。然れば則ち三界(この世)は皆仏国なり(法華經を信受すれば現世が浄土になる。』(『立正安国論(広本)』、『昭和定本』1,478頁)一切衆生の成仏の可能性を認め、その実現を願う大慈悲に溢れた仏心を具え、無限即有限、永遠即時間を体得した釈尊の悟りの境地が込められた『法華經』に全身全霊で帰依する南無妙法蓮華經の唱題によって、正覚を成就し得ると日蓮は考えた。『法華經』は人として現れた迹仏である釈尊の説法でありながら、永遠・無限の本仏の心の現れなのである。釈尊は『法華經』の如来寿量品において、自らの永遠性を述べ、自身が本仏の顕現であることを表明している。「法華經は釈迦牟尼仏なり。』(『守護国家論』、『昭和定本』123頁)『法華經』の釈尊は無限・永遠の法身^{ほっしん}、修行により仏果を成就した報身^{ほうじん}、人間である応身^{おうじん}の三身を具えている。この經に帰依することによって、我々自身も釈尊と同じように、この三身を体得するに至るのである。日蓮は南無妙法蓮華經と唱えれば、これが成就するとする。日蓮は唱題によって『法華經』の經力が我々に働き、成仏が可能になるとし、機根の落ちた末法の衆生にも悟りを成就せしめる行法であると高調した。

「法華經は現世安穩・後生善処の御經なり。』(『彌源太殿御返事』、『昭和定本』807頁)法華經は現世のみならず、来世に於いても我々に幸せをもたらす。日蓮は唱題によって多くの人々が開悟し、来世を待たずに、この世に理想の世界が実現されることを自らの宗教活動の目標とした。苦悩に満ちた末世は極楽に転じ得るのである。

註

・『法華經』からの引用は、法華經普及会編『真訓両読 妙法蓮華經並開結』(平楽寺書店、2017)を使用。引用箇所は、本文中の引用文の後に、『真訓両読』と略記し、品名、頁数を示した。

・日蓮からの引用は、立正大学日蓮教学研究所編纂『昭和定本 日蓮聖人遺文』(身延山久遠寺、2000)を使用。引用箇所は、本文中の引用文の後に、引用著作名に続いて『昭和定本』と略記し、頁数を示した。

- ・大正藏經とあるのは、大正新脩大藏經の略である。
- ・引用に当たり、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
- ・論文中の漢字の振り仮名は筆者が付した。
- ・論文中の丸括弧内の説明は筆者が付した。

1 『無量義經』、説法品、大正藏經、第九卷、386頁中

2 天台大師・智顛『妙法蓮華經玄義』、大正藏經、第33卷、690頁中

3 同書、大正藏經、第33卷、697頁中一下

4 智顛『摩訶止観』、大正藏經、第46卷、52頁上

5 同書、大正藏經、第46卷、53頁上

6 同書、大正藏經、第46卷、54頁上

7 智顓『妙法蓮華經^{もんぶつ}文句』、大正藏經、第 34 卷、2 頁上